

美唄歯科医師会 50年の歴史を語る

三井美唄炭鉱病院歯科について	雨田 実
三菱美唄鉱業所病院歯科の変遷	宝崎 幸子
美唄労災病院歯科とのかかわり	宝崎 錠二
学校検診をふりかえって	扇谷 明典
恒例の旅行会について	大坪 義和
美唄三師会史	平 隆一
1.5才並びに3才児健診をかえりみる	前山 善彦
美唄歯科医師会と月形町、浦臼町	雨田 実
開業当時の歯科器材をふりかえって	宝崎 幸子
美歯会事務の歩み	桜田 昭美

三井美唄炭鉱病院歯科について

雨 田 実

三井美唄炭鉱病院は、昭和7年11月、三井美唄に産声をあげた。はじめは、内科、外科、薬局、ベット数16で、医院並みで発足した。初代病院長は犬塚院長が就任した。同10年レントゲン室新設。同11年2月増改築。23ベッドとなり、その折に歯科室が新設されたように考えられる。その頃、南美唄で歯科医院を開業していた扇谷一貫先生が、開業医のまま嘱託で歯科の責任者として入られたと思われる。昭和12年4月、中田四郎先生、第2代病院長就任。昭和12年5月1日、美唄大火、同年7月7日、日華事変勃発し、扇谷一貫先生は同年秋応召、中支戦線に出征中は当時、美唄町議で兄の扇谷重憲先生が同業者のため、応援に出向して診察したそうである。昭和13年12月内科医長の本山先生（軍医中尉現本山医院々長の父上）が応召の折に病院職員全員の記念写真に、中田院長、本山医長、扇谷重憲先生の姿がある。他に森下歯科技工士の姿もある。

戦争が拡大、石炭の増産のため鉱員その他増員が重なったため、病院も忙しくなり、歯科も多忙を極めたようで、一貫先生が除隊された後も、2人で診療されていたという。昭和18年12月、徳田炭鉱を三井炭山が買収し三井新美唄炭鉱が発足（東明三区）。新美唄炭鉱病院が開院し、ベット数12、医師3名、歯科医師1名（谷本芳信先生 東歯卒）のスタッフであったという。終戦後、昭和21年4月、石塚 安先生が第3代病院長に就任した。同24年、青木金亮先生、第4代病院長就任（三井上砂川炭鉱病院副院長兼務のまま）。青木院長になってからスタッフの定着が良くなったと、言われるようになった。院長独特の政治力と抜群の行動力を十二分に発揮して、病院内の整備に努め、病院関係予算は、すべて満額予算が通り他の部課から羨望の眼で見られたものであった。その頃かく言う小生が歯科に勤務した。扇谷一貫先生、高橋常美先生、私、雨田。その翌年には石原利男先生が赴任して歯科部長に就任した。その頃昭和25年頃が、三井美唄の炭鉱病院が、最も充実した時代であったと思われる。

医師19名、歯科医師4名、ベット106床、外来1日500名を数える大病院となり、その忙しさは猫の手も借りたいぐらいで、待合室兼廊下はいつも患者さんで一杯であった。

昭和27年には現在の美唄学園のところに百床の結核病棟も出来、昭和34年8月まで活動していた。昭和33年、斉藤政男先生が第5代病院長に就任した。

昭和20年代の三井美唄炭鉱病院歯科は他のどの科と比べても一番忙しかったと思う。日中の8時間の診療時間のほかに1日おきに、一番方の勤務者を対象として夜間診療を実施していた。それがまた、大変な数の患者さんで夜間だけで50人を越すことも珍しくない有様で、朝の受付の始まる時の混雑は大変なもので、受付でのトラブルは日常茶飯事であっ

た。そのせいか、看護婦でも助手及び見習の殆んどが、歯科担当になることを敬遠していたようであり、特に主任看護婦は受付係のため殆どが嫌がっていたようであるのを見ても、歯科の忙しさが他の科と比べて群を抜いていたことと思われる。

三井新美唄炭鉱病院歯科の谷本先生は本業のほかに、野球が大変上手な先生で、塩野義野球でも、道歯会野球大会でも花形であったのに、昭和25年退職、上砂川町で開業されたが後に静内に移られ、現在はご子息の純先生がご立派に、2代目を継がれ盛業中である。谷本先生の後に橋本先生が新美唄炭鉱病院歯科の責任者となり、昭和29年4月閉院まで居り、その後、三井美唄炭鉱病院歯科に移られた。その時の歯科部長は石原先生であった。その間三井美唄炭鉱病院に勤務された先生がたを私の知る限り思い出して見る。昭和28年清水 進先生、同29年斉藤安彦先生、同30年菊田 博先生、同31年岡部啓一先生、久保田比出夫先生、同32年高津正直先生の諸氏を思い出す。石原先生は昭和36年定年退職後四国坂出市の回生病院歯科に勤務された。現在はご長男の伊織先生が屋島仲町で歯科医院ご盛業中である。三井美唄炭鉱病院は昭和38年7月27日閉山と共に病院も歯科も閉鎖した。その時の歯科責任者は菊田 博先生であり、先生は苫小牧王子病院歯科に移られた。現美唄歯科医師会、小森副会長と北大同期卒の、菊田善夫先生はご長男で函館でご開業盛業中とのことである。

美唄市大通北一丁目、城下病院々長（前美唄医師会々長）城下先生も昭和30年4月から1年間三井美唄炭鉱病院に勤務されたことがあり、現在も旧三井美唄、旧新美唄炭鉱病院の職員の集まりである、美友会の主要メンバーの1人として、昨年9年11月8日、第5代斉藤病院長、本間薬局長及び故人となられた諸先輩を追悼して旧職員が多数集まって、お別れ会をホテルスエヒロで開催したときの会長であった。炭鉱と共に生れ炭鉱と共に栄え、そして炭鉱と共に消えた、三井美唄炭鉱病院を大変懐かしく思う。小生は、昭和27年から10年ほど砂川の三井東圧化学の病院に勤務した。その間も、心ある諸先生から「人生は限りがありますよ」という忠告を幾度か耳にしたことを覚えている。30才をすぎた頃から体力の限界を急に感じたので遅きに失したが昭和36年、美唄で開業した。おそかりし由良之介ではないが、階前の梧葉すでに秋声を身をもって味わった。20代から30代前半の一番無理のきく大切な時期を、三井財閥にご奉公これ勉めてしまった。下司の知恵は後から廻るとはこのこと。後の後悔先に立たず。15年前に座骨神経痛の腰痛を2年程患う苦労はあったが他に病気もせず40年近く働くことが出来て、2人の子供達も、道を間違えないで一人前になってくれたし。人生上を見ても下を見てもきりが無いものとすれば、75才の現在でも毎日、1時間、7キロのジョギングと、2キロの6角棒の素振り200回の日課を、こなせることの有難さを、神仏に毎朝手を合わせて感謝している。こう書くと随分と悟りきっているみたいで、真実とは程遠いように思えてならない。しからば、どう書けば本当かとなるとやはり、あきらめきれぬと、あきらめた。と書けば凡夫の本心に近いように思える。

三菱美唄炭業所病院歯科の変遷

宝 崎 幸 子

三菱美唄炭業所病院は、大正5年の創設ときいております。

大正7年の診療科目は、内科、外科、眼科、産婦人科となっており「炭砒の生活史」によりますと、大正8年になって初めて歯科が出来たようです。

歯科に関しては、余り詳しい資料はありませんが、聞く処によりますとこの年に歯科の診療が行われていたということのようです。昭和7年に病院が全焼し、翌8年新築着工し昭和9年3月に竣工したということです。

戦前の炭砒病院歯科に勤務されていた、先生方のことについては、市の資料館、図書館にも確かな文献もなく、詳しくは知られておりません。

その後、昭和22年9月に分院として、盤の沢町に滝の沢分院が開設されて永井源太郎先生（高橋常美先生の同級生）が、日東茶志内にも三菱茶志内病院が、昭和25年3月に開設し佐々木茂夫先生、小沼四郎先生、鬼塚周博先生、加藤由比先生が、又、常盤台にも常盤台分院が、昭和25年11月に開設され、大場精治先生が、それぞれ歯科診療に従事されておりました。

昭和23年当時、本病院の方は、歯科部長に大橋先生が、そして、富田鍊也先生と私と三人で歯科診療に従事しておりました。患者さんは、炭砒病院と言っても坑内で怪我をした人は余りいなく大方は、従業員とその家族の虫歯の治療と抜歯、そして補綴ということでした。大橋先生が辞められたあと、昭和24年に山本 俱先生（現在札幌に在住）が、部長として着任、昭和33年までご活躍されました。

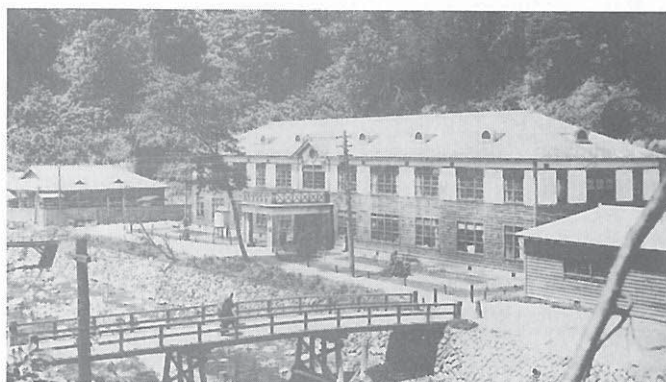
三菱茶志内病院の佐々木茂夫先生は、お酒が大好きな先生で、お酒と言えば永井先生もお酒をこよなく愛し、かなりの酒豪であったときいておりました。過日、記念誌の参考資料にと思い、昭和38年まで会に在籍されておりました、今仲先生のご子息にお願いしましたところ昭和20年日東美唄小学校口腔検診の際に写された、今仲・高橋・桜田・扇谷、の四先生の珍しいスナッフ写真の送付があり、大変懐かしく拝見、記念誌にも載せていただきました。滝の沢分院の永井先生が昭和25年に転出され、後任には江頭ミサヲ先生が着任されて会社の経営上昭和38年5月に閉鎖されるまで従事されておりました。

昭和28年に中安安雄先生、昭和31年に宗岡五郎先生が、昭和41年に伊藤孝輔先生が勤務されておりました。昭和33年1月に山本先生がお辞めになり後任に、角野喜代太先生が着任し昭和42年の炭砒閉山までの長い期間在籍されておりました。

炭砒の発展と共に三井、三菱両炭砒の医療機関の設置は、美唄市の発展と密接な関係を

もち人口の増加と共に増えていったのですが、時代の流れ（エネルギー革命）の荒波をともにうけ、会社の経営上やむなく閉山、それと共に病院も閉鎖され市民の生活は、炭砒の盛衰に大きく左右されました。昭和42年に三菱美唄砒業所病院、三菱茶志内砒業所病院はその輝かしい栄光の歴史の幕を閉じました。

なにぶんにも昔の事、十分な資料もなく記憶力の限界もあって、間違いが多かろうかと思いますがお許し願いたいと思います。



三菱美唄砒業所病院本院（大正10年）

美唄労災病院歯科とのかかわり

宝 崎 錠 二

昭和30年5月に美唄労災病院が開設され、当時は内科、外科、整形外科、の3診療科と病床数42床であったと記録されております。その後昭和33年1月11日、耳鼻科、歯科、3月に神経科、皮膚科、泌尿器科が新設され、40年には全ての計画工事が完了致しました。しかし石炭産業に従事する労働者の労働医療の為に設立されたにも拘らず、エネルギー革命による石炭産業の斜陽化にともない、美唄炭鉱もあいついで閉山、9万人も有した人口も大きく減少しました。その中にあって、初代、若松不二夫院長を中心に近代病院として拡充整備を図っている時期、昭和40年5月9日に歯科の岡田一夫先生が、くも膜下出血で急逝されました。その後1年程一時歯科を閉鎖しておりましたが、入院患者さん、取り分け脊損患者（当時車椅子の患者さんが多かった）からの歯科受診の希望が高まり、若松院長からの熱心なご依頼を受けて、私共、宝崎幸子、宝崎錠二、が週2回木曜（錠二）と土曜（幸子）の半日を労災病院歯科に出向する事になり、入院患者と職員を対象に診療の再開をしたのが昭和41年の夏であります。

スタッフは、歯科技工士の小笠原俊彦さん、歯科衛生士の阿部アイコさん、の2名（後に看護婦の黒沼淳子さん）で、当初は応急処置程度と言うことでしたが、いざ治療を始めますと、歯科治療の特殊性からそのようなことでは患者も術者も満足の行くはずもなく、結局終末処置まで、又、抜歯を行った者に対しては補綴が必要になると言うことで、応急処置どころか計画診療へと移行せざるをえませんでした。

再開当時は古いユニット一台で行っておりました。電気エンジンの脇にエアタービンを取り付けビニールチャックを取り替えながらの悪戦苦闘を繰り返しておりました。その内に座位診療が始まり、昭和52年ヨシダのマルチエイトユニット一台を追加購入し古い機種と2セットで行うようになりました。

その間、美唄労災看護専門学校の講師依頼があり、昭和41年9月から、故岡田一夫先生の後を受けて、平成9年10月までの長期に渡り、歯科疾患と看護、という科目を頂き30名（当時は20名）からの乙女達の前で講義をすると言う貴重な体験をさせて頂きましたのも良き思い出となりました。平成9年10月からは、後任として久恒泰宏先生にお願いしてあります。

自分の診療所での治療のあと、半日と言えども出張し車椅子患者の治療を行なう事は、大変骨の折れるものでした。しかも昭和61年までの20年間継続して来た事に我ながら驚いているしだいです。このことは、二人で従事して来たこともありますが、なんと言っても、

若松院長先生との出会いがそうさせたものと、心から感謝している処であります。先生が昭和61年5月退任にあたり、歯科の業務を委託制にするので、その後を受けてはどうかと言うお話を頂き、昭和62年1月、宝崎歯科が歯科業務の委託を受ける事に成りました。その間、昭和61年6月に松野誠夫院長に代わり、昭和62年3月で美唄労災病院増改修5カ年計画が終り、歯科室も一新され、座位診療型オサダユニット3台、別室にデンタルX線撮影1台、シーメンスパノラマ撮影1台（形成科と兼用）、その他アナルゲジア吸入器等、近代的診療室に変わり入院患者は元より、外来患者の受付も行えるようになりました。

当時は、勤務医の希望が少なく、診療そのものの継続が大変困難な時期もございましたが、医療大学歯学部（当時、東日本学園大学歯学部）口腔外科教授、村瀬博文先生の絶大なる御協力を頂き、比較的短時間の出張交代制ではありましたが、無事乗り越えることが出来ました事、今もって感謝している処であります。

昭和62年1月 再開院 当時東日本大学歯学部口腔外科医局より非常勤として。

北村完治先生、道谷弘之先生、平 博彦先生、麻生智義先生、宮田雅代先生

以上5名の先生方が、曜日交代で10月まで勤務されました。

昭和62年11月から平成1年3月31日まで、北海道大学歯学部卒、奥山雅貴先生が常勤として勤務。

平成1年5月から平成2年3月31日まで、鶴見大学歯学部卒、畑山真喜子先生が勤務、その後宝崎歯科医院の都合により、宝崎歯科分院が継承し、平成2年4月1日から平成5年8月まで、日本歯科大学卒、山本勇樹先生、平成5年9月から現在まで、北海道大学歯学部卒 久恒泰宏先生が勤務されております。

この11年間の流れを改めて見直してみても、激動の歯科界の一端を見る思いが致します。

昭和62年1月再開院の患者数は、一日平均29.9人と、当初の13.3人を大きく上回りました。当然デンタルスタッフも3名に増員され現在では27.3人の診療を行っていましたが、平成9年からの窓口患者負担増の為か、患者数は減少傾向にあります。全体の30%が入院患者、30%が労災従業員関係、40%が外来患者となっていますが、近くのリハビリセンター又労災リハビリテーション北海道作業所からの患者が他科に関わりながら、歯科診療を受けることも総合病院ならではの良い面ではないでしょうか。

勤務条件も、8時間労働の週休2日制は、今も実施されておりますが当初は大変魅力がありました。労災病院と言う性格から、車椅子の患者さんが多く、治療椅子への移しかえが大変な作業でありました。従業員の腰痛問題もあり、是非、車椅子専用のユニットを購入して頂く旨お願いありました処、松野院長のご理解により、平成6年にオサダの車椅子専用ユニットが実現し、患者、術者共に大変喜ばれましたのも記憶に新しい処であります。

今、振りかえって見ますと、あの歯科激動の時代1日60～70名という患者の波にもまれ

最後に、美唄歯科医師会50周年記念誌、50年の歩みに、美唄労災病院歯科についての回想の機会を与えて頂きましたことに、深甚の謝意を表すると共に美唄歯科医師会の今後ますますのご隆盛ご発展を祈念致す次第です。

[illegible]